

宮袋季美先生著『バリア★ブレイク』（雲母書房）から抜粋

ふらっとに初めて来たお客さんが、私が出迎えたときに発する第一声。



「こちらの代表の方を呼んでください」

「私ですけど……」

お客さん、目が泳いで肩で息してる。

そこへ行くと子どもはわかりやすい。

「おばちゃん、なんで髪の毛、黄色なん？」

「きれい、触らせて……」

なんでまたハデな髪にしたかということ、結婚して生まれた息子の障がいをなかなか受け入れられずに落ち込んでいた時期に、なじみの床屋へ行ったからだ。

私はもうクチャクチャの頭して、暗～い表情で、「こんな子産んで人生終わった」っていった。そしたら店長の奥さんの富田千秋さんが急に鬼の形相になった。

「別に子どもに障がいがあったっていいにか。好きな頭しとられよ。アンタらしく金髪にでもしられ!」って吠える吠える。

富山型デイサービスは、今までの福祉のスタイル、高齢者は高齢者、障がいのある人は障がいのある人、子どもは子ども、という枠組みをとっぱらった。

赤ちゃんからお年寄りまで、障がいがあってもなくても、住み慣れた家で暮らしながら、昼間過ごせる場所を提供する生活支援のこころみだ。

制度を壊したのはもちろん、福祉の現場で働く人たちのケアの本質もぶっ壊した。

私は、カレシが妻子持ちとは知らなかった。発覚したのはある事件があったから……。

たまたま私の小児科実習の日に、ある子どもが、腸重積という重篤な病気になって救急車で運ばれて来た。その父親が私のカレシだった。子どもに付き添って嫁さんも来ていた。まだ若かった私はパニックになって処置室から逃げた。

なんの運命か、そのときの実習指導者がたまたま惣万さんだった。惣万さんは逃げようとする私の襟首を捕まえて一喝した。

「おまえ、職場放棄か。今逃げたらプロじゃない。一番先にするんは命を守ることやろ」って。あのときに完全に刷り込まれた。あの体験は確実にふらっとの運営に役立っている。

初対面の人には、笑っているのか、発作を起こしているのか、身体が痛いのか、正直なところわからないだろう。そんなことを勝手に誰かに決められやすい。だからこそやっぱり障

がいのある人たちの声なき声を読み取れるようになりたいと思う。そのためには、五感を研ぎ澄ますこと、そして、つきあい続けること。そして、読み取れる人は一般市民にも伝えて行くといい。長く付き合えるようなかわり続けて行くしかない。

自閉症の子どもの親はみんな膀胱炎になる。うちら膀胱炎と戦う、戦友やちゃ。

日本で毎年3万人が自殺するニュースを聞いてお母さんがはいう。

「私、忙しくて首を吊るヒマもない。縄をどっかにかけているあいだに、子どもが飛び出して誰かにケガさせてるかもしれん。それが心配で追いかけて回している」

これが多動な子を持つ親の本音だ。

ふらっとのスタッフはバラエティに富んでいる。年代もバラバラ、趣味や生き方もバラバラ。子育て中だったり、病気を抱えてたり、みんなそれぞれ、いろいろある。私はなるべく同じような人を雇わないようにしている。

そのうえ、ふらっとのスタッフはけっこう長続きしている。すぐやめたスタッフは今まで一人もいない。ありがたいことだ。

たとえば、シゲはここに来る前、知的障がい者の入所施設で2年間働いていた。職員が55人の大きな施設で職員同士の人間関係に疲れたのだ。

「この上司について行けばだいじょうぶ」とか、噂話が飛び交っていた。

そこへいくと、ふらっとのスタッフ会議は、お客さんの話で終始する。ふらっとを使ってみんなの豊かさを追求する上でモメる。ケアの方法をマニュアル化して効率化する大型施設のやり方とは真逆の手作りのケアだ。

翔矢は1週間のうちの4日間を山で肉体労働、1日をお年寄りのデイサービス、あとの2日間を家で寝てるか、ふらっとに来るか、どっかに夜遊びするかの生活を送っている。昔じゃ考えられなかった重い知的障がいのある大人の生活を、翔矢は送ることができている。

成人式の数か月前に、翔矢の同級生の何人かと偶然いろんなところで再会した。「翔矢、自動車学校行った？」「どんな仕事しとんが？」

健常者なら聞かれる当たり前の質問。その質問がうれしかったし、ありがたかった。だって、それは翔矢の同級生が、翔矢に障がいがあるということには、まったく着目していない証拠。私はブツ飛んだ。ひっくり返った。

「翔矢、字も書けんし、本も読めんし、運転免許取れるわけなからう？」という、「あっ、そうか」って。

あきれたし、おかしかった。

自分の宿題の5文字

花 器 実 虚 美